

産経新聞

エジプトの大統領にシーシー
元帥が選ばれたのはさほど不思議でない。何よりも、アラブの春が開花させた言論や集会の自由は、エジプト社会に無秩序と混乱を招いてしまった。モルシ

歴史の交差点 明治大特任教授 山内昌之



大統領を生んだムスリム同胞団は、イスラム国家の建設に踏み込む憲法改正まで決断したこと
で、国民世論に亀裂を広げたのであった。2013年7月の「革命」でシーシー国防相の率

いる軍が同胞団の権力を奪ったとき、国民の多数はシーシーの大統領襲職をほぼ予想した。それにしても、シーシーの得票率が96・91%であったのに、投票率は12年の52% (決選投票

現実を選んだエジプト

千億ドルが必要である。モルシも、12年に大統領になれば国に2千億ドルをもたらすと約束したが、どこからこの大金と財源を得るつもりだったのだろうか。シーシーは少なくとも有権者に過度の幻想をもたせる公約を一

切しなかった。いまエジプトの大統領に必要なのは、国民の疲弊と貧困に終止符を打つ現実感覚にすぐれた愛国的な指導者である。それはムスリム同胞団におけるイスラム国家論や、ナセルが挫折した

干渉する決断力があつた。モルシに憲法改正を恣意的に許していたなら、エジプトは最悪の場合にはタリバンの束ねるアフガニスタンのような国になったというのは誇張かもしれない。しかし、スンニ派版のイスラム政治体制としてイラン・イスラム共和国に匹敵する国家が「合法的」に生まれる可能性をあなたが排除できなかった。シーシーらの「革命」がおおむね国民の支持を受け、ムスリム同胞団の復権に拒否反応が強いのは、選挙という民主主義の手法に依拠しながら、政局と行政を「民主的」な外皮で覆いつつイスラム主義のイデオロギーと

社会政策で運営する危険を實際に体験したからだろう。イランやサウジアラビアに近い厳格なイスラム国家出現の危うさを察知したエジプト国民にとって、19世紀以来の歴史に照らしても、国防軍はムスリム同胞団と比べてまだ「ましな悪」として受け入れ可能だったのである。しかし秩序と安定を優先する代償は、ナセル時代のような軍情報部や公安警察主導の治安維持国家に戻りかねない危険であろう。米国経験をもつシーシーは、法の支配と人権の意味に正面から向き合う必要がある。が、その前途はますます多難である。(やまうち まさゆき)